

『唐物語』第十話原拠再考

古田島洋介

序

既に『唐物語』については、清水浜臣の『唐物語提要』（文化六年、一八〇九）以来、浅井峯治、川瀬一馬、吉田幸一、川口久雄ら先学諸氏によってすぐれた研究が蓄積されて来ており、殊に池田利夫氏の『日中比較文学の基礎研究——翻訳説話とその典拠——』（昭和四十九年、笠間書院）は、詳細な伝本調査とその系統づけを基礎に置いた労作で、『唐物語』研究史上、確固たる地位を占めている。また、当作についての簡にして要を得た手引は、三谷栄一編『体系 物語文学史』第三卷八物語文学の系譜 I 平安物語Ⅴ（昭和五十八年、有精堂）所収の翠川文子氏の概説的論稿「唐物語」に求めることができる。

しかし、遺憾なことに、中国の故事の翻訳説話（正確には

意識）である『唐物語』全二十七話について、研究の最も基礎となるべき各話の原拠は必ずしも確定されていないのである。清水浜臣が早くも『提要』において、第九・二十七話を除く各話の出典を挙げてはいるものの、それらが果して直接の原拠であるかどうかは頗る疑わしく、いわゆるB類本に見られる出典注記も室町時代末に付け加えられたと推定されることから、原拠の確定は今後の地道な研究の積み重ねに俟つ以外にないというのが現状である。

本稿では、清水浜臣の『提要』以来、先に掲げた翠川文子氏の概論まで、一貫して『唐物語』第十話の原拠として並記されて来ている『両京新記』卷三と『本事詩』情感第一のどちらが『唐物語』に類似した本文を持っているのかを検証・確認し、さらに若干の考察を加えてみたいと思う。

本文の対照比較

以下、『唐物語』第十話の本文を適宜区切りながら掲げ、その後に『兩京新記』と『本事詩』の本文を上下に対照して記す。上段が『兩京新記』、下段が『本事詩』である。

『唐物語』本文は、清水浜臣が『提要』に掲げる校訂本文を用い、池田利夫『唐物語校本』（昭和五十年、笠間書院）翻刻本文と照合の上、私に句読点および濁点をほどこす。この清水浜臣校板本は、池田氏の説く伝本系統のC類本にあたり、全体的に見ると「AB兩類に全くない後補、竄入、改変かと思わせるような箇所が相当に認められる」が、当第十話に関するかぎり、AB類本との重大な差違は見出だされず、漢字と仮名の配合の点でAB兩類本をそれぞれ代表する尊経閣文庫蔵本・宮内庁書陵部蔵本よりも読みやすいと思われるので、採用した次第である。

『兩京新記』（七十二年、韋述撰）本文は、尊経閣文庫所蔵『兩京新記卷三』（金沢文庫本。前田育徳財団、昭和九年、大塚巧芸社複製）を用い、福山敏男「校注兩京新記卷第三」（東京文化財研究所美術部編輯「美術研究」第一七〇号、昭和二十八年十月、吉川弘文館）翻刻本文と照合の上、必要があれば『佚存叢書』所収本文により校訂する。『兩京新記』

卷三の「延康坊——西明寺」の項の後半に当該本文が見える。

『本事詩』（八八六年、孟榮撰）本文は、『太平広記』卷一六六八氣義一V「楊素」所掲本文（末尾に「出本事詩」と注記あり）を用いる。『本事詩』については、一般に、顧氏文房小説本および津逮秘書本が最も整った本文とされているが、いずれも『唐物語』の成立時期（推定十二世紀後半）から見て、時代が下りすぎているため、より『本事詩』の古態をとどめていると目される『広記』所収本文を採用する。なお、年代の上からは、『類説』（一一三六年）所収本文をも考慮すべきであるが、『類説』は『広記』本文を抄録した内容であるため、当面本文考察の対象からはずしてさしつかえない。

『兩京新記』『本事詩』については、まず書き下し文を示し、その直後に中国語原文を記す。適宜句読点をほどこし、訓点は省略する。また、本文対比直後の「短評」中、『唐物語』は八唐V、『兩京新記』は八新V、『本事詩』は八本Vと略記する。

【A】むかし、徳言といふ人、陳氏と聞ゆる人にあひぐして侍りけり。かたち、いとをかしげにて、心ばえなど思ふさまなりければ、たがひにあさからず思ひかはして、とし月をふるに

陳の太子舎人徐德言の妻、
即ち陳主叔宝の妹、才色代
に冠たり。陳に在りて樂昌
公主に封ぜらる。初めて德
言と夫妻となり、情義甚だ
厚し。

陳太子舎人徐德言妻、即
陳主叔寶之妹、才色冠代、
在陳封樂昌公主。初與德
言夫妻、情義甚厚。

〔短評〕△唐Ⅴの「たがひにあさからず思ひかはして」
は、△新Ⅴの「情義甚だ厚し」に相当する。△本Ⅴにはこ
れに該当する記述がない。

〔B〕思ひの外に世中みだれて、ありとある人、高きもい
やしきも、さながら山はやしにかくれまどひぬ。さがたき
親はらからもよもにたち別れて、おのがさまく／＼にげさまよ
へるなかに、此人別れをしむ心誰にもすぐれたりければ、
人しれずもろともにあひ契りけり。

陳の太子舎人徐德言の妻、
後主叔宝の妹、樂昌公主に
封ぜらる。才色冠絶たり。

陳太子舎人徐德言之妻、
後主叔寶之妹、封樂昌公
主、才色冠絶。

陳氏の將に亡びんとする
に属し、德言垂泣して妻に
謂ひて曰く

屬陳氏將亡、德言垂泣、
謂妻曰

〔短評〕△唐Ⅴの粉飾が目立つ件りで、乱世の描写がか
なり付け加えられている。按ずるに、△唐Ⅴの製作時期か
ら見て、保元・平治の乱の世相を反映しているのであらう。

〔C〕「我も人もいづかたとなかうせなんのち、おのづか
ら世中しづまりて、又もあひみる事ありなむ物を、そのほど
の有さまをばいかでかたがひにするべき」と聞えさするに、
女のとしごろ持たりける鏡をなかよりきりて、おの／＼その
かた／＼をとりて

「今、国破れ、家亡び、
必ず相保せざらん。子の才
色を以てせば、必ず帝王貴
人の家に入るべし。我若し

德言太子舎人為りしと
き、方に時の乱るるに属し、
相保せざるを恐れ、其の妻
に謂ひて曰く

德言爲太子舎人、方屬時
亂、恐不相保、謂其妻曰

「君の才容を以てせば、
国亡ぶるも、必ず権豪の家
に入るべし。斯に永く絶ゆ
るも、儼し情縁未だ断えず

死せば幸ひに相忘るること
無けん、若し生くればまた
復た相見るべからず。然り
と雖も、共に一の信を為さ
ん」と。乃ち一鏡を撃破し、
各々其の半を収む。

今國破家亡、必不相保。
以子才色、必入帝王貴人
家。我若死、幸無相忘、
若生、亦不可復相見矣。
雖然共爲一信。乃擊破一
鏡、各収其半。

〔短評〕徳言の科白を省略していること、△新▽△本▽
共にただ「鏡」としてるところを「女のとしごろ持た
ける鏡」と説明していること以外、△唐▽に目立った改変
は見られない。

〔D〕「月の十五日ごとに市に出して、此鏡のなかばを尋
ねさする物ならば、かならずあひ見て、たがひに其ありさま
をしるべし」といひつゝ、いといたうちなきて別れさりぬ。

んば、猶ほ翼くは相見ん。
宜しく以て之を信とする有
るべし」と。乃ち一照を破
り、各々其の半を執る。

以君之才容、國亡必入權
豪之家。斯永絶矣、儻情
縁未斷、猶冀相見。宜有
以信之。乃破一鏡、各執
其半。

徳言曰く「子若し貴人の
家に入らば、此の鏡を將て
正月望日市中に之を貨らし
めんことを幸がふ。若し存
すれば、当に之を志し、生
死を知らんことを冀がふべ
きのみ」と。

徳言曰、子若入貴人家、
幸將此鏡令於正月望日市
中貨之。若存、當冀志之
知生死耳。

〔短評〕△唐▽の「かならずあひ見て、たがひに其あり
さまをしるべし」は、△新▽の「当に之を志し、生死を知
らんことを冀がふべきのみ」に相当する。△本▽に該当部
分はない。なお△唐▽の「いといたうちなきて別れさり
ぬ」は、和文らしい情緒過多の添加と言えよう。

〔E〕そのうち、この夫、恋しさわりなくおぼえて、いた
づらに月日をすぐすまゝには、いかなる人に心をうつして契

約して曰く「他日必ず正
月望を以て都市に売れ。我
当に在るべくんば、即ち是
の日を以て之を訪ねん」と。

約曰、他日必正月望賣於
都市。我當在、即以是日
訪之。

りしことをわすれぬらんと、むねのくるしさおさへがたくぞおぼへける。

まそ鏡われてちぎりしそのかみの

かげはいづちかうつりはてにし

〔短評〕この一節、△新▽△本▽共に対応本文がない。

△本▽の一部分（後出）を拡大したものと考えられるが、次の〔F〕の冒頭の「かやうに思ひやりけるにしも」という書きぶりから推して、別れた後の陳氏の運命（F）と対照させるために、徳言のその後のありさまに筆を費したと考える方が自然に思われる。なお、徳言の「まそ鏡」の歌は、後出〔G〕に掲げる△新▽△本▽の五言絶句と内容が一致する。

〔F〕かやうに思ひやりけるにしも、色姿のなまめかしくはなやかなるにやめで玉ひけん、時の親王にておはしける人にかぎりなく思ひかしづかれてとし月をふるに、ありしにはにるべくもなきありさまなれど

陳の滅ぶに及び、其の妻果して隋軍の没する所と為る。隋文以て素に賜り、深

陳の亡ぶに及び、其の妻果して越公楊素の家に入る。寵嬖殊に厚し。

く素の寵嬖する所と為りて、為に別院を営み、其の欲する所を恣にせしむ。

及陳滅、其妻果爲隋軍所没。隋文以賜素、深爲素所寵嬖、爲營別院、恣其所欲。

〔短評〕△唐▽は楊素を「親王」と呼んでいる。楊素は、はじめ郢国公に封ぜられ、のち△本▽にあるように越国公に封ぜられた。陳氏が楊素に寵愛されたありさまについては、△本▽よりも△新▽の方が詳しく記している。△唐▽の語気文勢は△新▽に近いと言えよう。

徳言、流離辛苦、僅に能く京に至る。

徳言流離辛苦、僅能至京。

〔短評〕この部分は△本▽に見えるだけで、△新▽に該当箇所はない。事件の推移の上では前掲〔E〕に対応するが、内容の懸隔が甚だしく、△唐▽が△本▽のこの一節を

及陳亡、其妻果入越公楊素之家。寵嬖殊厚。

参考にしているとは思いがたい。

〔G〕此かゞみのかた／＼をいちに出しつゝ、昔の契りとのみ心にかけて、よのつねはしたもえにてのみすぐしけるに、かゞみのわれもたる人をし尋ねあひて、をとこ女のありさま、たがひにおぼつかならずしりかはしつ。

陳氏、後に閨奴をして望日破鏡を売らしむ。市に詣り、務めて価を高からしむるに、果して徳言に値ふ。徳言価に随ひ、便ち酬い、奴を引きて家に帰る。涕を垂れて以て其の故を告げ、並びに己れが片鏡を取りて之を合せ、其の妻に寄するに及び、詩を題して云く、
鏡と人と俱に去る鏡帰る
も人帰らず復た恒娥の影
無し空しく明月の輝きを
余す

遂に正月望を以て都市に訪ぬ。蒼頭の半鏡を売る者有り。大いに其の価を高くす。人皆之を笑ふ。徳言直ちに引きて其の居に至り、食を予へ、具に其の故を言ふ。半鏡を出だし、以て之を合せ、乃ち詩を題して曰く、

鏡と人と俱に去る鏡帰る
も人帰らず復た嫦娥の影
無し空しく明月の輝きを
留む

陳氏後令閨奴望日賣破鏡。詣市、務令高価、果値徳言。徳言隨價便酬、引奴歸家。垂涕以告其故、并取己片鏡合之、及寄其妻題詩云

鏡與人俱去
鏡歸人不歸
無復恒娥影
空留明月輝

〔短評〕徳言と、陳氏の半鏡を売る者との市における遭遇を、△唐△は全く省いてしまつてゐる。また、△新△△本△共にここに徳言の詩を置いてゐるが、△唐△は既に〔E〕で徳言の歌を記してゐた。

〔H〕女これを聞けるより、おぼえずなやましきこゝちうちそひて、うつし心ならぬけしきを見とがめて、親王あやしみとひ玉ふを、さすがにおぼえて、しばしはいひまぎらはしけれど、しひてのたまはすれば、わびしながら有のまゝに聞えさせつ。

遂以正月望訪於都市。有蒼頭賣半鏡者。大高其價。人皆笑之。徳言直引至其居、予食、具言其故。出半鏡以合之、乃題詩曰

鏡與人俱去
鏡歸人不歸
無復嫦娥影
空留明月輝

陳氏鏡を得て詩を見、悲愴にして流涙し、因つて飲食すること能はず。素其の慘悴を恠しみて、其の故を問ふ。具に事を以て告ぐ。

陳氏得鏡見詩、悲愴流涙、因不能飲食。素恠其慘悴、而問其故。具以事告。

陳氏詩を得て涕泣し、食はず。素之を知る。

陳氏得詩涕泣不食。素知之。

に夜装悉く之を与ふ。

素愴然爲之改容、使召德言、還其妻、并夜装悉與之。

聞く者感嘆せざるは無し。

愴然改容、即召德言、還其妻、仍厚遣之。聞者無不感嘆。

【短評】△唐Ⅴの「親王あやしみとひ玉ふ」「有のまゝに聞えさせつ」は、△新Ⅴの「素其の慘悴を恠しみて、其の故を問ふ。具に妻を以て告ぐ」に対応している。△本Ⅴはいかにも簡略である。

【I】親王これを聞玉ふに、御袖もしほりあへず、あはれにいみじくおぼされけるにや、よそほひいかめしきさまにていだしたてゝ、昔のをとこのもとへおくりつかはしたるに

素、愴然として之が為に容を改め、使して德言を召し、其の妻を還して、并び

愴然として容を改め、即ち德言を召して、其の妻を還し、仍ち厚く之を遣る。

【短評】△唐Ⅴの「よそほひいかめしきさまにていだしたてゝ」は、△新Ⅴの「夜装悉く之を与ふ」に対応する。△本Ⅴはこれを「厚く之を遣る」としているだけで、衣装を与えたかどうかは明確でない。「聞く者感嘆せざるは無し」は△本Ⅴにのみ見えるが、簡略ながら、後出【K】の△唐Ⅴ△新Ⅴ本文に相当する。

【J】德言かぎりなくうれしきにつけても、まづ涙ぞさきだちける。

契りおきし心にくまやなかりけん
ふたゝびする中川の水

陳氏行くに臨み、素邀めて詩を作り、別れを叙せしめんとす。固辞すれども免れず、乃ち絶句を

仍ち德言・陳氏と偕に飲み、陳氏をして詩を為らしめて曰く、
今日何の遷次

為りて曰く、

今日何の遷次

新官旧官に對す

笑ふと啼くと俱に敢へて

せず

方に驗す 人と作るの難

きを

陳氏臨行、素邀令作詩叙

別。固辭爲絕句曰

今日何遷次

新官對舊官

笑啼俱不敢

方驗作人難

新官旧官に對す

笑ふと啼くと俱に敢へ

てせず

方に驗す人と作るの難

きを

仍與言德陳偕飲、令陳氏

爲詩曰

今日何遷次

新官對舊

笑啼俱不敢

方驗作人難

ざりけん人よりも、親王の御なさけはなほたぐひなくこそおほゆれ。

時人、陳氏の流落を哀し

むも、素を以て寛恵と爲す。

遂に徳言と江南に帰り、

竟に以て終老す。

時人哀陳氏之流落、而以

素爲寛恵焉。

遂與徳言歸江南、竟以終

老。

〔短評〕話の末尾のこの部分で、△新△と△本△は決定的な相違を示しており、△唐△は明らかに△新△に一致している。前掲〔I〕の△本△にある「聞く者感嘆せざるは無し」も楊素に對する世人の賞讃であるが、陳氏と對照した上で親王△楊素をたたえる△唐△および△新△の筆遣いとは、かなりのへだたりがあると言えらるだろう。

結論

〔短評〕△新△△本△共に、楊素との別れにあたって陳氏が五言絶句を作ったことになっているが、△唐△はこの設定を受け継ぐことなく、全面的に書き換えてしまっている。「契りおきし」の歌は徳言の歌とも読めるし、あるいは作者の感想を述べた歌とも解すことができる。その内容も陳氏の絶句とは全く異なっている。

〔K〕いやしからぬありさまをふりすてゝ、昔の契を忘れ

以上、本文の対照比較によって、『本事詩』よりも『両京新記』の方が『唐物語』第十話に近い辞句を持っていることは、大旨納得していただけるであろう。実際、『両京新記』を傍に押し遣って、積極的に『本事詩』を『唐物語』第十話の典

抛として考えなければならぬ箇所は一つも見当たらない。したがって、今後『唐物語』第十話の原拠を記す場合は、『兩京新記』卷三を筆頭に掲げ、『本事詩』は、同時に参照した可能性もある文献として、添え書きする程度にとどめるべきである。⁽²⁾

そして、『兩京新記』卷三が確かに『唐物語』第十話の原拠であるとするならば、従来の説を一部改める必要が生じるであらう。それは、当話の末に記されている「いやしからぬありさまをふりすてゝ、昔の契を忘れざりけん人よりも、親王の御なさけはたぐひなくこそおぼゆれ」という評言に対する解釈である。

枳尾武氏は、これを「唐物語独得の感想」⁽³⁾とし、また池田利夫氏は、『唐物語』の結語に儒教的教訓が多い中で、この評言を少々異例とし、「再縁していた妻（＝陳氏）を非難してはいないばかりか、親王妃となりながらも鏡を市に出し続けた彼女の誠実さを一応評価し、しかしそれ以上に、親王が女性を元の夫に返したのを立派な行為としている。尤もこれは、相手が身分違いであるからであらうか」⁽⁴⁾と述べているが、本文比較の【K】に明らかな通り、この『唐物語』の評言は、ほぼ兩京新記そのままの翻訳であり、独自の感想とは言えない。また、たとえ独創的なものでなくとも、『唐物語』作者が何らかの意味を認めたからこそこの評言を書きつけたとい

うことは確かであるが、果してそれは、「身分違いであるから」というような理由によると解すべきなのだろうか。

徳言が半分に割った鏡を手がかりに妻と再会するというこの徳言分鏡説話は、先述の通り、『兩京新記』卷三の「延康坊——西明寺」の項の後半に載っているが、その前半には次のような文章が記されている。

本、隋の尚書令越国公楊素宅。大業中、素の子玄感誅せられて後、官を没せらる。武徳の初、万春公主宅と為る。

貞觀中、漢恭王に賜る。恭王死して後、官市寺を立つ。寺内に楊素の旧井有り。玄感誅せられしとき、家人金を以て井に投ず。後人窺ひ見て釣もて汲めど獲る所無し。今、寺衆之を靈井と謂ふ。僧の厨院の内に在り。初めて楊素隋朝に用事し、奢侈度を過ぐ。珍異を製造し、資貨儲積す。美姫有り。本〔陳太子舍人徐徳言の妻……〕

本隋尚書令越国公楊素宅。大業中、素子玄感誅後没官。武徳初、爲萬春公主宅。貞觀中、賜漢恭王。恭王死後官市立寺。々内有賜素旧井。玄感被誅、家人以金投井。後人窺見釣汲無所獲。今寺衆謂之靈井。在僧厨院内。初楊素用事隋朝、奢侈過度。制造珍異資貨儲積。有美姫、本〔陳太子舍人徐徳言妻……〕

つまり、『兩京新記』にあつては、徳言分鏡説話は楊素に關する話の中で紹介されているのであるから、「時人、陳氏の流落を哀しむも、素を以て寛恵と為す」という楊素に対する賞讃も自然に響くわけである。

この徳言分鏡説話は、『独異志』（九世紀半ば）巻下にも見え、その結びは「素之に感じ、乃ち徳言に（陳氏を）（還す素感之乃還徳言。之」陳氏の絶句「今日何遷次）」となつており、『兩京新記』に比べると、楊素に対する讃嘆の表現としては弱い、当時これがやはり楊素の寛大さをたたえる言葉であつたことは、『雲溪友議』（九世紀後半）巻上「襄陽傑」に「王敦女楽を駆りて、以て軍士に給し、楊素徐徳言の妻を婦す。財に臨んで色に貪すること莫れ」（王敦驕女楽以給軍士、楊素婦徐徳言妻。臨財莫貪於色）とあることから推測できよう。

すなわち、徳言分鏡説話の眼目は、もともと楊素の徳をたたえることにあつたわけである。

ところが、『本事詩』所収の当説話になると、わずかに【I】末尾に「聞く者感嘆せざるは無し」とあるのみで、話の結尾に楊素を賞讃する字句はない。これは明らかに、当説話の重点が、徳言とその妻陳氏の別離・再会に移行してゆく過程を示しているであらう。もっとも、『広記』はこの話を

「楊素」の表題のもとに掲げているから、話の元来の重点を見失っているわけではあるまい。

けれども、『太平御覽』卷三十（時序部十五）の「正月十五日」の項に所載されている当説話には、楊素をたたえる表現が全く見られず、さらに『類説』所収本文になると、同じく楊素に対する讃嘆の声が少しも聞かれないばかりか、表題も「樂昌公主」となつてしまつてゐる。

これを要するに、もともと『兩京新記』において、楊素を賞讃する逸話として引き合いに出されていた徳言分鏡説話が、その話の面白さゆえに、次第に徳言・陳氏の別離・再会物語として独立して行くさまが鮮やかに見て取れるであらう。

では、『唐物語』はどうか。【E】の加筆や【J】の「契りおきし」の歌などを見ればわかる通り、作者は明らかに徳言と陳氏の別離・再会に焦点を定めてゐる。それは、何よりも親王をたたえる結語が唐突な印象を与えることによつて立証されるであらう。中国本土で起つた説話の変容が、本邦でも見られるわけである。実際、管見に入つたかぎりでは、この第十話に「楊素」なる題名を付している『唐物語』の伝本は一つもない。

以上のような脈絡に置いて考えると、結局、『唐物語』第十話末尾の評言は、次のように解釈することができる。

——作者は『兩京新記』を原拠として徳言分鏡説話を綴り、

徳言と妻陳氏の別離・再会に筆を費した。しかし、この話が元来楊素を賞讃するものであったことを知っていたので、余りに話の原型が失われるのを好ましくなく思い、少々唐突ではあるものの、結語は原拠そのままに付けておいた。――

すなわち、『唐物語』第十話は、原・徳言分鏡説話のおもかげを尾骸骨にとどめているわけである。作者が末尾の評言を記した理由は、その思想内容ではなく、このようにその翻訳態度にこそ求めるのが妥当と思われるのであるが、果していかであろうか。

〔注〕

(1) 池田利夫『日中比較文学の基礎研究——翻訳説話とその典拠——』(昭和四十九年、笠間書院) 六七頁。

(2) 『唐物語』の作者と目される藤原成範の父藤原信西通憲の『通憲入道蔵書目録』第二十八櫃に『両京新記』が収められている。『本事詩』『広記』の名は見当らない。

(3) 朽尾武『唐物語の比較文学的研究稿』(昭和四十三年、手書き印刷本) 四八頁。なお、当書は『唐物語』各話について、原拠との本文比較を行なった労作であるが、原拠の確定に甚だ学問的精度の欠けている点が惜しまれる。

(4) 池田前掲書二〇頁。